

月影



第44号

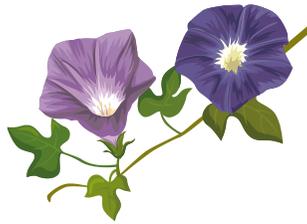
わたし

私がさびしいときに、

ほとけ

仏さまはさびしいの

金子みすゞ



何も言わず
そっと見守る
仏さま。

私が、
うれしいときは、
うれしい顔に。
悲しいときは、
悲しい顔に。

そのお顔に
救われる。

ほうねんししょうにん ひやくよんじゅうごかじょうもんどう
法然上人「一百四十五箇条問答」

問 ななきい こし 七歳の子死にて、い忌みなしと申候もうしそろうはいかに。

答 ぶつきょう 仏教には忌みいという事ことなし。

法然上人がお残しになられたお言葉は数多くあります。この「一百四十五箇条問答」もその一つです。

一百四十五箇条問答とは、日常生活の仏事についての具体的な質問に、法然上人がお答えになられる問答が収められているものです。

この問答を見ると、平安時代の人々の暮らしの様子や、法然上人のお人柄をうかがい知ることができます。

さて「忌み」とは…。

人は「死」というものをできるだけ避けたいと考えます。葬儀の時に、清めの塩を用いるのも、この考えから起こっています。身内に不幸が起きた場合も、一定期間生活の行動を慎むなどして、他の人と距離をおくことを「忌み」と言います。

その「忌み」について、ある人が法然上人に質問をしています。

「七歳の子どもなら、亡くな

っても忌む必要はありませんか。」

それに対して法然上人は、「そもそも仏教には忌みというものはない。」

と答えておられます。

現代でも、不幸があった時、新年の挨拶を遠慮したり、神社への参拝を慎んだりしていますが、法然上人の教えによくと、もともと仏教には忌みはないので、その必要はないということになります。

当時の人々の日常生活は、忌みに左右されていたと言われています。そのせいか、この一百四十五箇条には、「忌み」についての質問がたくさんされています。しかし、法然上人はその都度、気にする事はないとおっしゃっています。

お盆の迎え方

お盆は、お浄土からご先祖さまたちが、懐かしい我が家へ帰って来られる期間です。ご先祖さまが心地よく過ごせるように、家族みなでお迎えしましょう。

はかえこう なぬかぼん

墓回向（七日盆）

八月七日。

お墓の掃除をし、ご先祖さまを迎える準備をします。

お寺で水塔婆を受け取り、家の仏壇（精霊棚）にお供えします。

迎え火 むかひ

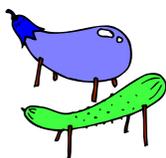
八月十三日。

家の玄関先やお墓で、おがら（乾燥した麻の茎）やワラなどを焚いてご先祖さまをお迎えします。この火を目印にして、ご先祖さまは各家に帰って来られます。

そして、仏壇とは別に設けた精霊棚（しゅうりょうだな）に、さまざまなお供え物をささげて供養します。

棚経 たなぎょう

住職がお檀家さんの家を一軒一軒読経にまわります。精霊棚の前で読経するので棚経（たなぎょう）といいます。

お施餓鬼 せがき

八月十六日。

仏壇（精霊棚）にお供えしていた水塔婆をお寺にお持ちいただきます。

施餓鬼棚を設けた本堂で、組寺僧侶五人が読経し、各家先祖代々の精霊の水塔婆回向をして供養します。お檀家さまにもお焼香をしてもらい、ご先祖様の供養をするとともに、ご先祖様を再びお浄土へお送りしていただきます。法要後、ナスと竹串につけた施餓鬼旗をお渡しします。玄関またはお仏壇におかざりしていただき、一年間の家内安全と無病息災のお守りとしてもらいます。



あれこれ仏教用語

盆踊り（ぼんおどり）

盆踊りは、日本各地で行われている夏の行事です。

もともと念仏聖の空也（九〇三―九七二）、一遍（一一三九―一二八九）などの「踊り念仏」が起源とされています。

盆踊りは、その地域に暮らす人々の娯楽であるとともに、各家にお帰りになつていゝるご先祖さまたちの歓待と慰めの意味が強いとされています。



常林院盆行事

◎墓回向 ※墓地のある方

八月五日（日）

六日（月）

七日（火）

午前七時より午前中

墓前と本堂にて回向します。

◎棚経

八月一日から十四日

日時はお葉書でお知らせします。

◎お施餓鬼

八月十六日午後六時半より

当寺本堂にて

※お申し込みは当日までにお寺まで。

永観堂だより

永観堂ご法主中西玄禮猊下

「緑陰法話」ご案内

日時 八月一日・二日・三日

朝七時より

場所 永観堂放生池畔

※雨天は鶴寿台

題目 釈尊の教え「法句経」

に学ぶ

ご来聴の記念として毎日
抽選で色紙を進呈。

また、法話の後に点心の接待があります。

※申込みは不要です。

平成二十四年七月一五日
浄土宗西山禅林寺派

常林院 発行